

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第51回

国際協調主義と国粹主義とのあいだ：島崎藤村の南米(上)

なぜ日本ペンクラブ初代会長は1936年ブエノス・アイレス講演で雪舟を論じたのか

ワシントンからのメモランダム 6
(Memo randum from Washington No.6
: as of Sep.16, 2007)

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター研究
員、総合研究大学院大学教授)

1936年、アルゼンチンのブエノスアイレスで第14回国際ペンクラブ総会が開催された。このとき日本は公式にはじめて参加している。日本代表は、最初の日本ペン倶楽部会長、島崎藤村(1872-1943)。『若菜集』の詩人、『夜明け前』の作家は、どのような経緯で南米へと旅立ち、その旅程で何を見たのだろうか。また『巡礼』(1937-40)にまとめられたその南米での見聞や経験は、作家の晩年とどのように結びつき、周囲にいかなる波紋を広げたのか。そしてその軌跡は、今日いかに再評価できるのだろうか。

日本ペン倶楽部の創設

日本ペン倶楽部は、前年の1935年に創設されている。11月26日の発会式での藤村の談話には「文学上の国際的理解促進や各国文筆家相互の親和に資し」ている団体として「国際ペン・クラブ」が紹介され、同様の組織が日本でも必要との認識から発会した旨、説明されている(全集8巻356)。藤村はこれにより日本で文筆に従事する作家たちが、いままでの「全くの孤立状態」から脱することを希求している。だが事態はそう単純ではない。1931年9月18日の「満洲事変」、翌年の満洲国成立に続き、日本はこの傀儡国家の国際認知を望んだが、それは

拒絶され、33年には国際連盟を脱退していた。当時、日本は「孤立を脱する」どころか、むしろ孤立への道を辿りはじめていた。

そして日本ペン倶楽部の創立も、この外交的孤立を挽回するために、外務省主導でなされた文化政策の一環をなしていた。藤村も談話で述べるとおり、倶楽部創設にあたっては、外務省文化事業部および国際文化振興会が、最初の斡旋をとったものだった。国際文化振興会は、英訳では Society for International Cultural Relations と訳されているが、この訳語からも明らかのように、日本の文化事業の国際発展に寄与する機関、という含みを補わないかぎり、英語名称としては、とても自律できない性格を宿している。現在の国際交流基金の前身に当たるこの機関そのものも、外務省の外郭団体であり、それが正式に成立したのは、日本の国際連盟脱退の直後、1934年になってのことだった。

一方の国際ペン・クラブは1921年に創立され、23年には第1回国際総会を開催している。30年代に入るとクラブは緊迫の度合いを深める国際情勢にじかに翻弄されはじめる。ヒトラーが権力を掌握して直後の、1933年のドゥッロブニクでの第11回国際大会では、クラブはナチによる焚書や作家弾

庄に抗議している。この会議でH. G. Wellsが、John Galsworthy の後を襲って、二代目会長に就任している。ナチ政権下で、ベルリン、ハンブルク、ケルン、ミュンヘンにあった4つの国際ペン・クラブの扉は、いずれも33年秋までに閉鎖された。ドイツが国際連盟を去るのは35年10月のこととなる。

ドイツの場合と比べると、日本ペン倶楽部成立事情の特異性が際立つだろう。そして実際、日本ペン倶楽部は、ロンドンに本部のおかれた国際ペン・クラブには直接は加入していない組織だった。藤村の談話はその点を巧みに^{はか}暁しているが、会報に印刷された談話には、事務的追記がなされ、日本ペン倶楽部がロンドンの組織からは独立した団体であることが明言されている（『日本ペンクラブ30年史』70）。推察するに、ここには関与した官僚の政治判断が働いている。1927年のブリュッセルにおける国際ペン・クラブ大会で、初代会長のゴールスワージーは、藝術作品が国粋主義的な感情や政治によって左右されてはならない旨の宣言を謳っており、これは後年ペン・クラブ憲章にも生かされる。だが、1935年11月には日本政府および議会は「国体明徴」を唱えるに至っていた。国際ペン・クラブの主旨に同意することは、日本の基本的国策に抵触する。そうした時代背景下に日本ペン倶楽部は設立されていた。

すでに明らかなように日本ペン倶楽部は、その創設の段階からやっかいなジレンマを抱えていたことになる。国際協調主義を唱える組織との親和を^{うた}謳いながら、国粋的な傾向を強める国家政策の補助に役立つことが期待されていたからだ。「相互親和と相互の信義」は当時、国際文化振興会も掲げていた標語だったが、すでに国際社会において日本の「相互親和」や「信義」は著しく信用を損ねていた。そして藤村の語る「相互親和」は、実際には、ロンドン本部への「非加入」という事実を婉曲に言い表すための隠れ蓑に等しかった。さらにこの「相互親和」によって日本の作家たちを「長い

孤立から救う」という期待を語る藤村の言辞は、現下の国際情勢に対する、倶楽部初代会長としての、許容限度いっぱい^のの意見表明でもあっただろう。国際連盟脱退に伴う日本の国際的孤立を憂いながらも、「今は国の歩みも^も難い時でありまして」（前掲全集358）とのみ触れることで、政治情勢への直接言及は避ける。そして、話題をたくみに現在の外交的孤立から、日本の文化的孤立へと転じて、国際ペン倶楽部参加によって日本を文化的孤立から救済することの意義に及び、官僚組織から要請された方針にも適った初心表明を仕立て上げる。それを体制順応と嗤うのは容易いだろう。だがこの役割を過不足なく演じて^{あま}過たぬ人物に、官僚組織が白羽の矢を立てたのも、明白だろう。振り付け役を演じた官僚は、歌人として、藤村周辺とも結びつきの深かった、文化事業部の柳沢健と目されている。

ブエノスアイレス大会への参加

日本ペン倶楽部を日本軍国主義のプロバガンダ・マシーンと見なすのは誤りだろうが、倶楽部が外務省文化事業部の外部委託機関に等しい役割を担っていたことも、また否定できない。藤村は談話で、倶楽部が「小さな民間の仕事」であり「会員の自主的な団体として進みたい」との意向を表明しているが、これもいわば望まれた妥協の産物だろう。官僚組織としては、倶楽部は建前上、あくまで官庁主導ではない、民間の自主的な団体でなければ困る。作家側としても、これに先立つ「文藝懇話会」をめぐる混乱の経験もあり、行政の尻馬に乗っているとの印象は、極力避けねばならない事情があった。こうした配慮がまずは功を奏したというべきか、倶楽部設立はロンドン本部のウエルズから、歓迎の言葉で祝福された。背後には国際連盟脱退後の日本の孤立を憂えるロンドン外務省筋の意向があったとも推測されている。日本外務省にペン倶楽部創設を働きかけたのが、ほかならぬイギリス外務省だったらしいからである（前掲『30年史』56）。

このような状況下で、島崎藤村は外務省からブエノスアイレス国際ペン・クラブへの参加を要請される。静子夫人とともに随行したのは倶楽部副会長の有島生馬(1882-1974)。フランス語、イタリア語に流暢な外交手腕を買われてのことだが、有島が副会長の実務を担当することを条件に、周囲が藤村を説得して会長の座に座らせるに至ったとも言う。一行は1936年7月16日に神戸を出航。インド亜大陸の先端のコロンボ、南アフリカのケイプタウンなどを經由して西廻りに大西洋を越え、8月29日にサントスに入港。陸路ブエノスアイレス到着は9月3日のことで、国際ペン・クラブ開会は2日後に迫っていた。会議には39カ国から75名に及ぶ代表者が集い、会場となった市会議事堂は、国際ペン・クラブ大会史上はじめて、ひろく一般聴衆にも公開されたため、混雑を極めたといわれている。この会議の経緯について、藤村はいくつかの公式記録や手記をまとめているが、以下では冒頭の問題提起にしたがって、三点を中心に絞って検討してみたい。すなわちまず、日本代表団一行の公的使命、つぎに、作家会議の会場での藤村の意見表明の如何、第三に藤村の南米での公開講演。その演題の選択にはいかなる背景があったのか、探してみたい。

東京国際ペン・クラブ東京招致計画

日本代表団は、1940年に国際ペン・クラブ大会の東京での開催に同意を取り付けることを要請されていた。同年には、皇紀二千六百年祝賀のため、オリンピックと万国博覧会の東京招致も計画されていた。ペン・クラブに関しては、提案成立の内情は必ずしも明らかではない。だが、芹沢光治良(1896-1993)が『人間の条件』(1967:239)に実名入りで述べている記述には、外交官出身の芦田均が、日本代表団壮行会の席上を兼ねた臨時総会で緊急動議を提出し、それが承認されたとする見解が示されている。ブエノスアイレス会議の報告への「附記」でこの一件に触れた藤村は、こう腹藏なく

語っている。「一方には国際連盟からも退きながら、一方には文化的に手を握らうとすることそれ自身すでに困難があつて、折角託されてきた事ながら国際ペンクラブを東京に開きたいとの件もどうあらうかと案じられた」(408)。日本は国際ペン・クラブの「メンバー」ではない、という変則的な立場のなかで、有島が会議最終日にイタリア語で述べた提案は、藤村にとっても幸いなことに、満場一致で受諾された(英文報告書194-6; 仏文報告書178-80)。実際、報告書の翻訳文を読み直してみると、有島の演説は欧文の修辞をよく弁えていて、実に様になっており、主旨が聴衆にじか伝わった様子も、ひしひしと伝わってくる。とはいえ招致受理が適ったからからといって、藤村は憂慮の念を払拭したわけではなかった。ぬか喜びはできないですよ、と藤村は倶楽部関係者やお役人に、釘を刺すことを忘れない。「今後、世界の国々より集まる諸代表を日本に招き寄せるといふことには熟慮を擁する。各方面共に、余程の雅量なしには叶はぬことと思ふ」(409)。

そこで藤村が教訓として述べるのが、フランス代表の Jules Romains (1885-1972) とイタリア代表 Filippo Tomaso Marinetti (1876-1944) とのあいだで生じた論争だった。ジュール・ロマンはマリネッティが戦争を世界の浄化剤とみなし、少年に対する戦争教育の必要を説いていることを問題にして、これは平和を希求するペン・クラブの方針に対する挑戦であり、ほかならぬマリネッティ自身が当日午前の会議で推奨したペン・クラブとしての制裁措置の対象とされて然るべきではないか、と詰問した。これに対してイタリア側はフランス側の発言を悪意ある中傷として非難したため、喧嘩口調の罵り合いの応酬となり「議場騒然たる光景を呈した」という(404)。それに先立ちマリネッティは「伊太利に於ては文藝の関与する者を圧迫するが如きこと絶対にない、伊太利の「ファシスタ」と独逸の「ヒットレリスタ」とは絶対に之を比較することは出来ないと説きて「ファッシュ」の立場を明

にし」ていた(403)。こうした報告を通じ、「読者は亜国に開かれたペン大会がおよそいかなる論争の苦を経験したかをも看取せられるであらう」。フランスの人民戦線とイタリアのファシズムとの衝突は、また国際連盟脱退後の日本が直面している困難を照らす鏡ともなることを、藤村は示唆しなかったらしい。「南米その他の旅より帰りで」で、藤村はこの件をさらに敷衍し、「今日世界各国の政情が極左又は極右化し著述言論の自由漸く失はれんとする傾向」(429)への憂慮を表明する。その脳裏には、同年春に勃発した2.26事件の記憶も点滅していたはずである。

藤村はさらに、仏伊論争の調停につとめたGeorges Duhamel(1884-1966)が帰国途上のリオ・デ・ジャネイロでベン・クラブからの脱退を声明したことにも言及し(409)、また公式の報告からは除外したこととして、Stefan Zweig(1881-1942)の姿にも注目した。南米で読まれていることでは各国代表中にも右に出る者がなかろうシュテファン・ツヴァイクは、会期中、終始沈黙を守っていたが、ただ一度だけ発言を求め、流暢な、しかし力のあるフランス語で、今期をもって会長を退任するH. G. ウェルズの徳を讃え、その70歳の誕生日を祝賀するために一堂の起立を求めたのだという(409)。そこにはオーストリアの亡命作家による、ナチズムへの間接的な非難が込められていただろう。この6年後、ツヴァイクは流浪の地ブラジルで、自殺により、自らその生涯を閉じることとなる。

流産におわった藤村の演説

それでは、ベン・クラブ会場で藤村自身は、自らの意見を表明できたのだろうか。結論からいえば、藤村が望んでいた発言は、ほかならぬ僚友たる有島生馬の「諫止」により、発言されぬままに雲散霧消したらしい(430)。「成程仏蘭西代表の力説するとき平和促進の声には誰しも異存のあらう筈もないが、さう簡単に片付けてしまへないところに現代の深い悩みがある」(429)。

会議でそんな感想を抱いた藤村はまた「所謂国際的な物の見方も欧羅巴中心でありすぎる」(430)との印象を禁じえなかった。南アフリカ経由の旅程で、藤村は「欧羅巴人の東洋人に対して持つ謂はれなき排斥の念のいかに根深いものであるかを切に感じた」ともいう。「一切は実に欧羅巴人が東洋の無視に帰着する。一般の欧羅巴人は真の東洋についてあまりに無智である」。藤村は会議の題目に「知性と人生」という項目のあることも奇禍として、「人道の上」から、この東洋認知欠如の問題を世界40カ国の代表に向けて説こうと思いついていた様子である。

それをなぜ有島が制止しなければならなかったのか。両者の遣り取りは詳細には復元できないが、外交的な状況を勘案すれば、有島が「あまりにデリケートな問題」として難色を示した理由は、たやすく推測できるだろう。最終日に東京招致の件を諮る責務を負った有島としては、それに逆効果となりかねない挑発行為は、自粛こそ適切であれ、どうみても得策とは言いがたい。満洲事変以降の情勢が欧米の日本に対する不信を煽るなかでは、「人道的見地」はかえって揚げ足取りの結果を招きかねまい。さらにコロボや南アフリカの事例を示して西欧を批判することは、すぐさま大英帝国の植民地政策批判に直結しかねない。ロンドンの外交的配慮があって、ベン・クラブ本部も、国際委員会への日本の参加を要請しているなかで、水面下の後ろ盾を批判したのでは、外交戦術として、きわめて拙劣な愚行と見なされても弁解できまい。会議の英語中心主義は批判しつつも、イギリス政府の顔に泥を塗りかねない発言は、いかに正論といえども避けたいのが、有島の本音だっただろう。

結果として、藤村のベン・クラブ会場の短い発言は、自らも述べるとおり、ゲーテが夢見た「世界文学」に事寄せ、ベルギー・フラマン語派代表ベルメイランより提起された国際雑誌刊行案に賛意を表し、ロンドンの本部からの国際委員会への参加

要請に謝意を述べたに過ぎない。日本語での発言が通訳を通じて翻訳されたものであり、藤村の肉声が参加者に届いたとは、とうてい言い難い。仏文・英文訳の報告書全編を通読してみても、藤村登壇が、もっとも影の薄い発言のひとつに留まっていることは、否定できまい。

南米で雪舟の《山水長巻》を論じることその藤村が、プエノスアイレスで、みずからの抱いていたメッセージを伝えることを得たのは、2回にわたる公開講演の席上だった。ほとんど日本のことを知らない聴衆に対して、いかにして「真の東洋の姿」を伝えるか。そこに作家の苦心もあっただろう。今日でも日本専門家や日本愛好者を前にしての講演よりも、不特定一般の外国聴衆を相手にして講演は、主題の選定が難しい。そして作家の講演という行事が、今日よりはるかに大きな社会的な意義を担っており、しかも在外公館や、大衆化される以前の大学といった高等教育機関を舞台とした催しであったことも忘れてはなるまい。なにより藤村や有島生馬は、船舶による長旅が唯一の交通手段だった時代に、日本から公式に南米に派遣された最初の文化使節としての使命を背負った作家であった。

藤村はふたつの比較的短い講演を行っている。まず「近代日本における文学発達の経路」*Sobre del desarrollo de la literatura japonesa contemporánea*。9月17日、アルゼンチン文科大学講堂にて。つぎは翌18日、駐アルゼンチン日本公使館にて「最も日本的なるもの」*Lo más típico del Japón*と題する講演。このふたつめの講演は画僧・雪舟を論じるもので、そのため、藤村はわざわざ日本から2本の《山水長巻》(1486)

の原寸大複製を持参していた。幅40cm、長さは15m70cmに及ぶから、原寸大複製といっても持ち運びは容易ではなかったはずである。雪舟が中国滞在から戻り20年ほどを経過した67歳頃の作品とされ、当時1本は山内家所蔵、もう1本は原三溪の所蔵だった。*

藤村は日本を離れる段階では、雪舟の絵画がはたして南米のひとつとに訴えるものかどうか、自信はなかったと告白している。当時は私蔵であったことから、ごく近年まで《山水長巻》をゆっくり拝観できた人々の数は、日本でも限られていた。聴衆に混じっていた日本人移民の多くにとっては、複製であるにせよ、この作品を見たのがこれが初めてという人々が大多数だったという。たしかに1936年の段階で、雪舟は「吾国が生める最も大きな天才の一人」との認識を得ていたが、藤村は「その存在を知らしめるだけでも意味がある」というのが、日本公使館での講演の趣意であったことを記録している(412)。だがそれなら、いったいつごろから、東亜の禅僧・雪舟は日本を代表する画家として評価されるようになったのだろう。そして藤村はいかなる判断により、雪舟をして「最も日本的なるもの」として南米での講演の主題に選んだのだろうか。その選択は果たして国粋主義的だったのだろうか。それとも当時の国際的な環境に合致した判断だったといえるのだろうか。

*講演の翻訳の労を取ったのは国際文化振興会の「榎葉君」、G.Yosida Shinyaによる翻訳が追って刊行されたというが、筆者はまだこれらの人名、また訳書を詳らかにしていない。識者のご教示を待つ。

(以下、次号)